

防衛大学校本科第35期学生及び理工学研究科第28期学生 卒業式における学校長式辞（平成3年3月24日）

防衛大学校本科第35期学生及び理工学研究科第28期学生の卒業式を行うに当たり、海部内閣総理大臣^{注(1)}、櫻内衆議院議長^{注(2)}、土屋参議院議長^{注(3)}、池田防衛庁長官^{注(4)}をはじめ、国会議員の諸先生ほか内外多数の来賓並びに父兄の方々の御臨席を賜りましたことは、卒業生にとりましてはもとより、防衛大学校にとりまして無上の光栄であります。教職員と学生一同に代わり、来賓各位の御厚情と父兄の方々の御熱意に対し、心から御礼申し上げます。

500名の本科卒業生諸君、顧みれば昭和62年の春4月、桜吹雪の舞い散る中、はじめて防衛大学校の門をくぐった時のあどけなかつた諸君の表情を、つい昨日のように思い出します。

それから4年間、ここ小原台での生活は、諸君にとってかけがえのない一回限りの青春であり、若さと情熱を思いきり燃焼させた時代でありました。厳しい団体生活の中で勉学や訓練に励み、幾多の苦しいハードルを越え、試練に耐え、大きく逞しく成長しました。今や胸を張って堂々と卒業してゆく資格は、諸君のものであります。

タイ王国6名の留学生諸君に対しても、心からなる祝福を贈るものであります。

さて諸君は、これから陸・海・空それぞれの幹部候補生学校において、初級幹部としての専門教育を受けるわけですが、諸君の幹部自衛官としての修業は、全てこれからが本番であります。国家防衛の任はあ



第5代学校長 夏目 晴雄

注(1) 海部俊樹

注(2) 櫻内義雄

注(3) 土屋義彦

注(4) 池田行雄

くまで重く、その道は、遥かに遠いのであります。またプロフェッショナルとしての自衛官の道は、決して平坦なものではなく、その舞台は、名声や喝采とはおよそ無縁のものと覚悟しなければなりません。

レーガン前アメリカ大統領は、かつて国民に対するラジオ放送で、次のように述べております。

合衆国の軍人は、いま長期にわたる困難な任務に耐えている。彼らの多くは、故郷や家族から遠くはなれて勤務し、事に臨んでは祖国のために究極の犠牲を払うことを覚悟している。一言でいえば、彼らは、国家のために全てを捧げているのである。我々は、彼らの助けがあってこそ、合衆国の平和と自由が守られていることを忘れてはならない。

どんな職業であれ、何らかの献身や犠牲は必要でありましょう。しかし究極の犠牲、すなわち身命をなげうつことまでを要求される職業は、軍人以外にはありません。軍人は、単なる職業ではありません。何かそれ以上のもの、一つの生き方であります。己への名利、栄達、金銭的な利害の如きは二の次として、祖国への献身、国民への奉仕を内心の喜びとし、生き甲斐とする自衛官の本分も、これと異なるところはないのであります。

私は、諸君が自らの意志と決断により、その生涯を国家防衛の任に捧げようとしたことに対し、心からの称賛と敬意を表するとともに、この道が諸君にとって悔いのない人生となることを信じて疑いません。

詩人、高村光太郎はうたいました。

私の前に道はない　　私の後ろに道は出来る

逆風に立ち向かい苦難に耐えてこそ、道は開かれるのであります。逆境は人間最高の修行場であり、その中で使命観を持ちつづけることが、人間を偉大ならしめるということを銘記して下さい。

私は、またかねがね「優れた士官」であるためには、まず「真の紳士」でなければならないと説いてまいりました。このことは、自衛官としての透徹した使命観を自覚し、防衛の専門家としての知識技能を修得すべきはもとより、社会人としての幅広い教養と豊かな人間性を併せ持つことを意味します。

防衛大学校の教育は、視野の狭い戦争技術者の養成を意図したのではなく、国家社会の一員として、その職責を尽し得る資質の涵養を目的としていることは論をまちません。

諸君は、小原台での4年間、幾多の貴重な体験を重ねてまいりました。

伸展性のある資質も身につけた筈であります。自信を持ち、まっすぐ前を見据えて、幹部自衛官としての道を邁進して貰いたいと思います。

次に、理工学研究科60名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。諸君は、理工学に関する大学院レベルの専門的知識を修得すべく、2年間にわたって頭脳の充電を図り、将来への飛躍のポテンシャルを培う貴重な研究体験を積まれたのであります。思えばあと10年、世界は新しい世紀を迎えるのでありますが、この21世紀初頭において活躍すべき自衛隊幹部に求められる最大のニーズは、高度の科学技術力であります。

今後、諸君はそれぞれ新たな任務につかれるわけではありますが、更に研鑽精進され、自衛隊の科学技術分野の発展向上に尽力されるよう切望してやみません。

逍遙歌の一節にあるように、4年間にわたる小原台生活は、今まさに「夢の如く」その幕を閉じようとしています。これから先、同期生同士、その友情と団結を更に強め、いかなる部署、いかなる境涯にあってもお互いに手を取り合い、助け合い、祖国日本の輝かしい将来のために挺身してゆかれんことを心から祈念しつつ、ここに式辞を終わるものであります。